

令和7年度冬の展覧会 参観者の感想より

会場には色彩豊かでのびのびとした作品が並び見ているだけで明るい気持ちになりました。一枚一枚の絵や一つ一つの作品から子ども達が楽しみながら夢中になって取り組む姿が目に見え心が温かくなりました。また、作品の紹介文もそれぞれの言葉で書かれており、感じた事、考えた事、想像している物語等素直に表現されていて同じテーマでも一人一人これ程までに違うという事がとても面白かったです。「大人はつま先立ちをして子どもの感性の高みに手をのばす」、感性の分野では大人に優っている、というお話が附属幼稚園でも教えて頂いておりますが、まさにその言葉が思い出され、こちらの心を子ども達に豊かにしてもらえた贅沢な時間でした。

→ かつての図画工作の授業では、教師主導の指導によって、どの作品も似たようなものになることがあったようです。ですが、一人一人が違うように、同じテーマを与えられたとしても、表現も画一的なものになることはありませんよね。附属小の図画工作部が大切にしている言葉として、「作品は自分自身」というものがあります。子供たちは作品をつくる過程の中で、自身と向き合い、作品として表していきます。この過程を重視して、図画工作の授業を展開していきます。授業の中では、児童のもつ感性に驚かされることが多々あります。本校図画工作部では、この感性は育成可能なものとして、研究を進めています。パブロ・ピカソは、「ラファエルのように描くには4年かかったが、子供のように描くには一生涯かかった」という言葉を残しているようです。つまり、どれほど子供の感性が豊かなものなのか分かる言葉だと言えます。少しでも児童の感性を磨くことができるように指導していきます。

展覧会に行く際はいつも考えさせられるのですが展覧会では各クラスでテーマを決めつつも、やはり先生の意図とは異なる作品を作る児童がいて(もちろんそれはそれで素晴らしい作品ですが…)きっと先生は口を出したいけれども、児童の思いを優先してくださっているのだろうと思います。

それを考えると、私は息子に対して「こう聞いたら、こう返してほしい」「こう指示したら、こう動いて欲しい」と勝手な期待を無意識に押しつけてしまっていないかと毎度自問自答して反省してしまっているのですがやっぱり展覧会でポケモンはいかがなものかな?と思うので息子に注意をしてしまいました。自分の息子だけではなく、他のお子さんの世界や成長が見られる心温まる素晴らしい機会なので、これからも続けていただけたらと思います。

先生方お忙しい中でのご準備大変だったかと思いますがこのような機会をいただき誠にありがとうございました。でも、本当にご準備大変だと思うのでボランティアを募集してみたいかなとも思います。お声掛けいただければ、喜んでお手伝いさせていただきます。

→ 「さっき見たときの方が作品の完成度的には高かったのに…」と教師が感じることは図画工作の授業をしていれば、日常茶飯事です。そして、子供からも「終わりました。終わりにしていいですか?」という質問もほぼ毎回の授業で受けます。時と場合によって対応は変えますが、改めて自分の作品を見返したり、友達の作品を見たりするように促すと、「あ!」と何かに気が付いて、自分の席に戻ってまた作り始めることが多くあります。勿論、教師(大人)が指導しなければならぬことはあります。どの部分を児童に委ねるのか、この匙加減を見極めて、声掛けをしていきます。また、準備のボランティアについて、心強い御意見どうもありがとうございました!!

抽象的な表現をすることに取り組んでいるクラスがありました。おもしろいと思いますし、もっとやって欲しいと思いますが、子供たちは何をどう表現すればいいのかわからず、身近にある物やゲームに出てくるアイテムのような具象物に頼ったり、説明的な表現をしてしまったりするようです。

形に対する「文法」のようなものが足りないのか、あるいは都市型マンション生活で無駄な物が身の回りにない生活を送っているせいなのかわかりませんが、子供にいろんな物や形、素材に触れる機会を与えられていないのかもしれないと反省しました。

学校帰りの道草で野山に分け入り、自然が作り出す不思議な形に触れたり、ゴミ捨て場のガラクタから見たこともない形の人工物を掘り当てて帰ってきたり、毎日が冒険のようだった田舎の小学校生活を肯定するわけではありませんが、意外とそういうのが大事なんじゃないかと思いました。

→ 改めて学校教育で何ができるのか考えさせられる御意見だと思います。ほぼ全ての物がタブレット端末で検索できてしまい、表現するモチーフですら、検索する児童もいます。今後の図画工作・美術教育の課題であると強く思います。材料を並べたり積んだりして表現したり、手で直接触れながらどろどろ絵の具で絵をかいたり、色水を混ぜて太陽にかざしたり…。図画工作科には他の教科では学ぶことができない多くの可能性があると思います。図画工作科の授業で、人生をより豊かにしていきたいと思います。

「へんてこ山」というテーマで物語を自分で考え、絵を描いていました。とてもユニークな物語や素敵なタイトルの絵、淡くて優しい絵など皆さん本当に想像力豊かで楽しさが伝わってきました。それでも今回一番のお気に入りには息子の作品です！ダークな世界観がカッコよく、その先の物語を聞いてみようと思いました。先生方のご指導に感謝申し上げます。(因みに oasis、幸運な事にライブに行きました！)

→ 保護者の方に、お子さんの作品のファンになってほしいと思います。他の作品と比べてしまうと、足りないところも見えてきてしまうかもしれません。ですが、「作品のこの世界は、この後、どうになってしまうの？」という会話が、図画工作の発想・構想だけではなく、様々なことにより影響を与えるものだと思います。作品を紹介するコミュニケーションは素晴らしいと思います。…そして、何よりも oasis 羨まします。

作品の種類が学年毎ではなくクラス毎に違うテーマの展示でしたので、大変見応えがあり楽しかったです。息子からは、鑑賞後にステキだと思った作品の作者さんにメッセージを書いて送る活動をしたと聞きました。そのような活動自体が素敵だなと温かい気持ちになりました。就学前の体験授業の際に校長先生(※石上前校長)が「子どもたちが遊んで創造したものに対して『これは何?』と問い『これはね…』と伝えて初めてそれは「作品」になり表現活動になる」というお話をされていたことを思い出します。展覧会を通じて、表現する側としても受け取る側としても、表現活動の価値が子どもたちの心に自然と根付いていくように感じました。先生方におかれましては、日頃のご指導ならびに展覧会の準備・開催にご尽力いただき、心より感謝申し上げます。

→ ここでも、作品を介した対話の重要性がわかります。「作品」とは、つまり何なのか考えさせる言葉です。製作したものに対して、きちんとしたフィードバックをするとさらにその作品は意味をもつものになると考えます。学校でも表現したものに対して、大人、子供限らずにフィードバックしていく機会を増やしたいと思います。

これまでの絵画や作品は色彩豊かな花やニッコリとした表情の本人が描かれていたり、キラキラとした装飾があったり、形も整った物ばかりだったので、少し驚きましたが、壊れた様に変形させたり、くっつけたり工夫していて、芸術作品に見えてきました。これまでと違った感じに挑戦することもなんだか成長を感じ、帰って『良かったよ』と娘に伝えました。娘の他にも閉じ込められた設定の感情を表現していたり、暗く怖い印象の作品もあつたりしましたが、作品紹介を見ながら、それぞれお子さんが表現したいことが伝わってきて、多様で楽しかったです。

→ 同じ作者だとしても、製作した時の児童の状態によって、その内容は変わります。また、長期的スパンで見ても小学校生活6年間であれば、その変化は尚更です。「自分自身」を表すことは大人でも難しいですね。さらに自分自身と対話することで、表現する楽しさも感じながら、製作できるようにしていきたいと思います。

同じテーマでも似た作品は一つもなく、これが個性なのだと感じました。それぞれが内から溢れ出るものを自分なりの表現方法で示し、生徒同士のみならず先生や保護者、外部の方々に発信することにより、またそれを受け取った人が自分の中で消化して新たな何かを生み出す。といったサイクルが何かしらに生きてくるのではないかと思います。息子は、もっとこうすればよかったと思う出来栄え、と言っていたのですが、いざ見てみると夢中になりかいた気持ちが伝わってきて、息子の頭の中を少し覗いた感じがして嬉しかったです。

→ 美術作品を鑑賞する意味について、鑑賞した者が新たな何か生み出すという営みが大変素晴らしいと思いました。受け取る側の感性もとても重要だと感じました。作品を見て何かを感じ取ることの楽しさも授業の中で学ばせていきたいと思いました。

休日に学校に来ることが苦手な息子でしたが、今年初めて一緒に展覧会に参加できました。自分の作品を見せるのは恥ずかしそうでしたが、自分が気に入った作品や、自分のペアの作品をわたしたちに誇らしげに紹介しているのを見て、学校の図工の授業を通して、作品作りだけではなく、作品を鑑賞する力も養っているのだなと子供の成長をみることができました。次の展覧会も楽しみにしております！

→ 学校に来てしまえばこっちのものだと思わせるエピソードですね。これは、図画工作の学びに限らず、学校での学びを「休日に学校に来る」という特別なことと併せて、保護者の方に伝えたいという思いが強くなることがあると思います。是非、今回の春の展覧会も来校してもらい、児童の作品を介して、たくさん御家庭でお話してもらえればと思います。

子どもからどのような作品を作ったのか聞いて自然と頭の中に想像していた作品と、実物にギャップがあり、見た瞬間に驚きを感じました。また、その材料のその部分だけをあえて使ったのだなという意外性のある作品もあり、予想できないところに面白さを感じました。どの作品も熱中して題材に取り組み、試行錯誤しながらも時には偶然にいい表現を発見したりして工程を楽しんで作られたのだろうなという感じがして、見ているだけで制作時のワクワクが伝わってくる素敵な展覧会でした。

→ 図画工作で授業を行う上で大切にしていることが下線部に凝縮されています。作品製作の過程は、人生の営みに似ていませんか？試行錯誤しながら、よりよい人生を探求していくし、偶然にいいことも起こる可能性がある。よく図画工作科の学習を行う意味として、「よりよいものを試行錯誤して見付けていくこと」が挙げられることがあります。そのような意識が少しでも育つように、指導をしていきたいと思います。

冬休み明けのお忙しい中、このような会を開いてくださり、ありがとうございます。会場の設営や、お休みの日に朝早くから受付していただき、先生方のお心遣いに毎回頭が下がります。まず構成としては、平面と立体にわかれていて、立体の中でも、多目的ホールと暗室での展示といったように区別されていたのと、開催日も数日にわけてくださっていたので、鑑賞者が密集することなく良かったです。

音楽の演出も工夫してくださって、場に合うものをお選びになっているのかなと感じました。暗闇の中では特に聴覚が際立つような気がして、五感のおもしろさを実感しました。子供の作品については、どの子の作品も、子供たちの「今」が詰まっていると思うと、全ての作品が愛おしく感じられました。どのお子さんの作品も見どころがあって、子供が持っている良さを先生のご指導により、さらに引き上げていただいていると感じました。

クラスごとにテーマや扱う材料を変えて制限を設けることで、ルールがある中で逆にその子の個性が発揮されるように感じて、面白かったです。そして、技術的に上手な子の作品だけを展示するのではなく、全校生徒の作品を展示してくださっているところが、あらためてステキだなと思いました。それは、一人一人の作品を見ていく中で惹きつけられるのは、技術的にうまい作品だけではなかったからです。この子は どうしてこの絵を描いたのだろう？と考えさせられるような作品や気持ちがこちらに伝わる作品があり、それが、親子で一緒に鑑賞していても、親子でそれぞれ心にひっかかる作品が異なるからです。そこから子供が自分の感じ方を説明したり、私が説明したり、対話が生まれました。1つのものを見て、色々な角度から物事を感じ取れるよう、沢山のよさに気づける人間になれるよう導いていけるように、親としての責任を感じましたし、もっともっと様々な経験をさせたり、これからも親子で対話を続けたりしたいなどあらためて感じました。

→ 人それぞれの考え方が異なることを鑑賞した対話から得られるとはなんと素敵なことではないかと思いました。仰る通りで、子供たちには様々な視点を持ち、よさに気が付ける人になってほしいと私たちも思っています。そのためには、本物に触れること、(できれば多くの人と)対話をする事、そして思い起こすことなどが大切なことだと考えております。学校教育だけでは、カバーできない面は御家庭でも協力いただきますようお願いいたします。

今回の春の展示会の感想もいただければ嬉しく思います。

以下の QR コード、URL からよろしく願いいたします。



URL

<https://forms.office.com/r/akLn170jJz>